

# 智性、勘性、温性。 量から質の時代へ

恋愛、震災ボランティア、知事、国会議員、さまざまな話題を、提供してきた田中康夫氏が、フルタイムの作家として戻って来た。「なんとなく、クリスタル」で当時21才だったヒロイン由利。2014年、50代になった彼女とともに。

「久しぶりに小説が書けたのは、失職して時間ができたというのも大きいですね」

たとえば長野県知事時代は、睡眠時間が毎日3、4時間という多忙さ。手のアトピーが、日に悪化した。

「ストレスが原因かな。ネックタイを締めるのにもひと苦労でした。ザラザラした手で握手するわけにもいかず、支援者が差し入れてくれた長野県産のシルクで編んだ手袋が欠かせませんでした。知事を退任したら、不思議とおさまりましたけど」

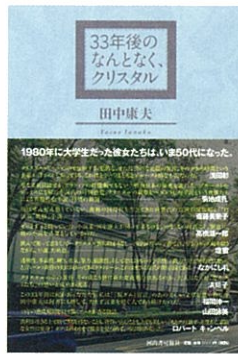
そんな時期も支えてくれた10才年下のJAL客室乗務員だった恵さんと結婚したのは、兵庫県尼崎市を地盤とする衆議院議員だった4年前のことだ。

## 妻と愛犬ロッタに癒される日々

恵さんは田中さんが16年も連載した異色エッセイ「東京ペログリ日記」に最多登場のW嬢のモデルといわれる。そう考えると、ずいぶん長い春だった。

「家内とは、ケミストリー(相性)が合うんでしょうね」

先日もこんなことがあった。今回の『33年後のなんとなく、クリスタル』の著者プロフィールはナント、タナカ家の家族の一員である4才のトイプードルのロッタ嬢が担当(という仕掛け)。「ロッタの書いた原稿」をテーブルに置いていたら、妻が買い物へ出かける前にチラッと見て、パパとママのウザイくらいの



## 田中康夫 Yasuo Tanaka

1956年東京生まれ、作家。1980年一橋大学在学中に執筆した小説『なんとなく、クリスタル』が第17回文藝賞を受賞。2000年より長野県知事に(2期)。2007年から2012年まで参議院議員、衆議院議員。11月末に17年ぶりの小説『33年後のなんとなく、クリスタル』(河出書房新社)を出版。http://www.nippon-dream.com/



3才のとき、母親の友人に「おとなしい坊ちゃんですね」と言われて「猫をかぶってるんです」と答えたような少年だった。「どうやら、その前日の夕食の会話で大学の研究者だった父と教師だった母が使った言葉らしく、意味は判らないけど、こんなニュアンスだと“耳学問”で思ったんですね。」

愛を一身に受けて成長中。なあって鉛筆で書き加えたんですよ。確かにその一文があるのとないのとでは違う。思わず、印税の10円分くらいは妻に振り込まなきゃと思います。なあんで、のろけ話に聞こえちゃいそうですが、僕にはない才能ですね」

執筆に行き詰まって「オレ、才能ないな」と夫がぼやいてると、「才能の枯渇は才能のある人が言う。by ニーチェ うそ」とメモがそつと回ってくる。「口



続編に登場するロッタちゃん。

ッタのご主人様は家内、僕は家内の執事」という家庭内序列が揺るがないのも、むべなるかな。夫婦ともに食べ歩きが好きな外食派だが、家で食事するとき





「なんとなく、クリスタル」発売後、ブランド品を身に着ける「クリスタル族」と呼ばれる女性があふれた。

は、タイ風はるさめサラダ（ヤムウンセン）や、季節の食材を使った土鍋ごはんなど、恵さんの手料理。お気に入りのイタリアの白ワインを2人で2本も空けて11時過ぎにはベッド、朝の5時にはロツタに起こされるとい生活だ。

田中さんの祖母は米国留学をした元祖クリスタル族のハイカラさん。その彼が前々回の総選挙で尼崎を選んだのは、自分に正直に生きる尼崎のオバチャンたちに、直感的に理解してもらえるのではと思ったから。

「頭でっかちな知性でなく、生活の中で得た『智性』。やわな感性ではなく、鋭い勘所の『勘性』。そして正義感と人情味を感じさせる高い体温の『温性』。そんな『地アタマ』を持った尼崎の女性

たちと僕は通ずる部分があったと今でも思います。

実は『なんくり』の女性達もそう。表層的にはアツパミドルと呼ばれる暮らし向きかもしれないけれど、すべてが数字で動く無慈悲な『市場経済』よりも、独居のおばあちゃんに『今日の切り身、ちよっと小さいから20円安くしとくよ』と声がかかる『市場』の人間味に共感するタイプ。そうして誰もが歯車に組み込まれて息苦しい社会の中で、『微力だけど無力じゃない』と信じて、自分の身の丈でやれることをやっていこうとする意欲。ブランドものを着ているとか、ブランドものを持っているとか関係ない。僕はそういう人達に惹かれるんです」

## なんくり最終ページの出生率データの意味は

33年前、『なんくり』の註の最後に、日本の合計特殊出生率と高齢化率のデータが2ページにわたって記されていたことに注目した人は少なかった。

「出生率が低下し、高齢化が進行するデータを見て、大学生の僕は思ったんです。日本は、右肩上がりという言葉で捉えられる社会ではなくなるかもしれない、と」

そして今、当時の予測よりも急速に少子化や高齢化が進んでいる。真の豊かさとはなんなのか、考えざるを得ない時代だ。

「なのに今回の政府の骨太方針は、50年後も人口1億人維持を掲げ、移民を受け入れる議論まで始めている。でもイタリアやフランスの方が、ずっと豊かな人生でしょ。両国と同じ6千万人前後で持続可能な日本を目指す発想の転換が必要だと思いませんか。そもそも福祉、医療、介護、教育といった分野は、人が人のお世話をして初めて成り立つ新しい雇用の場なのですから。時代は黄昏（たそがれ）に見えるけれど、この光の加減は意外にも夜明け前かもしれない。『33年後のなんとなく、クリスタル』は、そんな暗（あけぼの）の光を分かち合う物語なのです」

## 山田美保子さんが語る 33年後の『なんくり』

33年ぶりに会えた主人公の成長に元気をもらいました

95年の阪神・淡路大震災の後、田中さんが50ccバイクで被災地を駆け回り、外資系メーカーから提供を受けた化粧水や口紅を配っていたのが印象的でした。支援物資というところまで地味なものが多くけれど、気持ちが上がるようなモノを選ぶセンスがいいなあと思いました。

今回の『33年後のなんとなく、クリスタル』は、そういう田中さんの美意識がいろいろ出てくる小説で、読ませてもらってよかったです。う気持ちになりました。

田中さんの80年代の女性誌連載『サステイ』は、満たされていないのに満たされていない女性たちの感覚を描いていたけれど、『33年後』は違う。

年齢を重ねて、のどをうるおすすべを身につけてきたのが私たち。自分なりに感じとって行動することができるようになった年代の気持ちに寄り添ったストーリーでした。

田中康夫<sup>さん</sup>  
インタビュー **1**

思い描いた未来。  
便利でいい時代の  
はずだったのに…

▲当時は全国津々浦々で真つ当に働き・学び・暮らす若いも若きも、それぞれに夢や希望をいただいていたのだ。パステルカラーに彩られた、一億総中流社会ニッポンの一員として▽…『33年後のなんとなく、クリスタル』にはこんな一節がある。

「昔はカフェならぬ喫茶店でも、電話を取り次いでくれる所を待ち合わせ場所を選んだ。ハチ公前で待ち合わせした相手が遅れると、交通事故にでも遭ったんじゃないかと気をもんだもの。携帯電話やメールの登場でそんな心配はなくなった。でも、逆にその分、相手の気持ちや状況を想像する、考える<sup>あじ</sup>が退化しちゃったかも」と田中さんは言う。

音楽も同じ。かつて彼女や彼の部屋で、ドライブする車の中で、恋人たちが親密さを増すのに一役かっていた音楽は、いまやスマホにダウンロードしてイヤフォンで聴くものになって、人との関係を遮断している。

「会話を楽しむための触媒としての音楽が、逆にコミュニケーションを断ち切る装置になってしまい、ネット上でも一方通行の言いっ放しばかり。便利になったはずなのに殺伐としてしまった。だからこそ、人の顔が見える、体温を感じられる社会のあり方を、みなが問い直しているのだと思います」



田中康夫<sup>さん</sup>  
インタビュー **2**

時代に刻まれる  
世の中の文化に  
価値の優劣はない

33年前、岩波新書を読むのをあ  
りがたがるのと、ルイ・ヴィトン  
のバッグを買ってうれしい気持ち  
は、同じ人間が抱く等価な感情だ  
と言い放って、24才の田中さんは  
『良識派』の神経を逆なでした。

「その2つは同じ次元で語れない、  
と彼らは思い込んでいた。でも、  
大好きな食べ物を口にしておいし  
いと思う瞬間は、そうした教養人  
と呼ばれる人々にもあるのです。  
時代に刻まれる世の中の文化は、  
功成り名遂げた芸術院の会員だけ  
が生み出すのではない。原宿から  
も浅草からも、そして山あいの集  
落からも生まれる可能性がある。  
その当たり前前の話を認めようとせ  
ずに目をそらしてしまうのは、し  
なやかな日本の成熟を妨げること  
になってしまいますよ、と33年前  
も今も、僕は考え、語り、動いて  
いるのだと思います」



33年前の田中さん